

研究ノート クマ狩猟活動が持つ意義の多様性

著者	榎 厚生
著者別名	MASU Kousei
雑誌名	現代民俗学研究
号	3
ページ	59-69
発行年	2011-05
権利	現代民俗学会
その他のタイトル	Diversity of the Meanings Traditional Bear-hunting Has Today
URL	http://hdl.handle.net/2241/00143568

クマ狩猟活動が持つ意義の多様性

榊 厚生 *

MASU Kousei

Diversity of the Meanings Traditional Bear-hunting Has Today

It is thought that traditional bear-hunting in Japan has become a mere hobby whereas it was once a subsistence activity performed by hunting groups consisting of certain members of village communities.

However, a field survey on traditional bear-hunting currently performed in the Kotamagawa district of Oguni Town in Yamagata Prefecture has revealed that it has various meanings to life in mountain villages. The main meanings are that (a) it generates knowledge and skills that identify specific places within large mountainous areas; (b) it gives the opportunity to establish a personal and intergenerational relationship among members of village; and (c) its fruits spread through the giving of bear meat by bear-hunters to relatives who live in the Kotamagawa district.

Based on precisely understanding such diversity of the meanings of traditional bear-hunting, I'd like to discuss the future of the institution of wildlife management with environmental administrators and conservation groups from the perspective of Folklore.

キーワード：山地空間 知識 狩猟集団 クマ肉 贈与

1. はじめに

狩猟活動には多様な意義があり、この中で民俗学が重視してきたのは、食糧の獲得や、貨幣や他の物資等との交換を目的とする経済行為としての狩猟である [湯川 1983: 59]。また、近年では鳥獣による農作物や人身への被害が拡大し、これらの防除を目的とする狩猟が注目されている⁽¹⁾。そして、現在行われている狩猟を考える上で無視できないのが、趣味という捉え方である。例えば、クマ狩猟活動に関する調査が多く行われてきた山形県西置賜郡小国町小玉川地区を対象とした民俗調査報告書においても、「現在の主な生業は稲作、山菜、造林であり、狩猟は趣味程度となっている」 [成城大学民俗学研究会編 1977: 24] という捉え方がなされている。こうした

* 環境省中部地方環境事務所国立公園・保全整備課。なお、本稿は、所属機関の業務として執筆したものではなく、所属機関の見解を示すものでもないこと及びあくまで個人的な見解であることをお断りしておきます。

捉え方の背景には、かつて狩猟組織を律していた戒律がなくなり、狩猟組織が解体したという認識があると考えられる⁽²⁾。

しかし、現在行われている狩猟を趣味程度のものであると短絡的に結論づけてしまうことには問題がある。なぜならば、こうした位置づけが、経済行為、防除、趣味以外の要素が存在する可能性も十分検討し、全体を把握した上でなされたものではない、と考えられるからである。

ところで、近年、生業には経済行為以外にも注目すべき多様な意義が存在することが明らかにされている。篠原徹〔篠原 1995〕は、一本釣り漁や山村における植物利用等の事例を通じて、人々の持つ自然と対峙し観察して獲得される知識の総体である自然知や、自然知に支えられる技能を、民俗自然誌という形で明らかにした。そして、自然知が社会経済的な側面と並んで生業の重要な側面であることを指摘した。松井健〔松井 1998〕は経済的な意味が低い狩猟、漁労、採集等の生業活動をマイナー・サブシステムとして位置づけた。そして、これらの活動が自然と人間の関わり方の本来的な位相関係を、活動を行う人に深く認識させるので、身体性の問題を考える上で重要な意味を持つということを示している。さらに、菅豊〔菅 1998〕は新潟県岩船郡山北町（現村上市）の大川で行われている伝統的サケ漁をマイナー・サブシステムと捉えた上で、サケ漁が楽しみや遊びといった要素も具備する「深い遊び」であることを指摘している。その要素には、漁場や漁果をめぐる競争やかけひき等の他、漁小屋での漁仲間との交流、漁仲間以外の親戚や友人とのサケの贈答等によるつきあいを楽しむという人間関係の側面も含まれる。

そこで、上述の生業に関する研究の成果を踏まえて、狩猟に関する研究でこれまで大きく取り扱われてきたクマ狩猟活動を対象として、それが持つ多様な意義を明らかにしたい。多様な意義を明らかにするにあたり、クマ狩猟を支える狩猟者の自然に対する知識、人間関係の視点から見た狩猟集団の特徴、狩猟者によるクマ肉の利用について検討する。

2. 調査地及び当該地における2001年のクマ狩猟活動の概要

調査地はクマ狩猟活動に関する研究の蓄積が豊富である山形県西置賜郡小国町小玉川地区とした。筆者は同地区において2001年4月11日～5月10日の30日間に渡り、春のクマ狩猟活動を参与観察するとともに、2000年8月から2001年11月までの期間に5回の聞き書きを行った。

小玉川地区は、飯豊山（標高2,105m）のふもと、山に囲まれた標高約300mの平坦地に位置する。また、小玉川地区は、大字小玉川及び大字泉岡に分かれ、前者はさらに長者原及び小玉川の集落に分かれる。人口は、2001年現在で203人、そのうち男性96人で女性107人である。世帯数は、小玉川が19世帯、長者原が19世帯、そして泉岡が11世帯の合計49世帯である。年齢構成は60代の男性が15人、70代の女性が20人と多く、それ以下は世代が下るにつれて減少傾向にあるが、10代は男性19人、女性15人と人数が多くなっている。

小玉川地区では複合的な生産活動が行われてきた。具体的には稲作、畑作、焼畑（1950年頃まで）、狩猟の他、イワナやマス等を対象とする川漁、ゼンマイ、ワラビ及びキノコの採集等が行われてきた。狩猟は、過去には一定の収入を賄い、経済行為としての意味を持っていたものと考えられる。例えば、1936年5月に小玉川地区を訪れた映画製作者塚本閔治は、40人の狩猟者が「四日間で総計八頭の猟獲をあげた。其数千百円の収入は部落の貴重な肥料代として公平に分配される事になって居る」〔塚本 1941: 38〕と記録している。

小玉川地区における春のクマ狩猟活動は、「ヤマシュウ」や「シシヤマシュウ」と呼ばれるク

マ狩猟集団により行われている。クマ狩猟集団は1人のヤマオヤカタにより統率されており、ヤマオヤカタはK59-1⁽³⁾が務めている。

2001年春のクマ狩猟活動は4月11日～5月10日に行われた。この期間は県が有害鳥獣駆除を目的としたクマの捕獲許可を出した期間である。同時にこの期間はクマの捕獲に必要な自然条件が整っている期間でもある。その条件とは、山肌の多くが堅雪に覆われて狩猟者がクマの猟場に行くことができる、ブナが開葉していないため狩猟者が山肌を動くクマを目視できる等である。

クマ狩猟集団がクマ狩猟活動期間中に猟したのは17日間であり、筆者はそのうち15日間参加した。筆者を除く狩猟参加者は実数で10人、延べにすると76人、1回につき4人～6人の場合が多く、1日平均にすると4.5人である。この中で参加回数が10回以上と他に比べ有意に多い狩猟者が4名(K59-1、T51、K40、T38)おり、狩猟集団の中核を担っている。それ以外の者(K59-2、T68、T65、K64、I53、I47)は参加回数が8回以下となっている。狩猟方法は巻き狩りである。狩猟者は沢を境にテッポウ(射手)側とムカダテ(猟の指揮者)側に分かれて配置につく。まず、ムカダテ側の狩猟者がテッポウ側の斜面にいるクマを発見し、セコが声を上げてそのクマをテッポウに誘導するか、予測したクマの移動先にテッポウを配置してクマを撃つという形で行われる。この期間中に4頭のクマが捕獲された。

表1に出猟状況及びその役割分担、各出猟日におけるクマ狩猟の経過等をまとめた。

表1 2001年のクマ狩猟の状況

日付	狩猟場所*1	参加人数	参加者及び役割		巻き狩りの経過				降水量(mm)	備考
			ムカダテ側	テッポウ側						
4/11	水								0.0	
4/12	木								27.0	
4/13	金	5	(K59-1 T65 T51 K40 T38)*2		—	—	—	—	8.2	クマの冬眠穴を探索
4/14	土								8.6	
4/15	日								2.4	
4/16	月 A:3	4	K59-1	T51 K40 T38	探索;発見出来ず	—	—	—	0.0	温身平宿泊
4/17	火 A:22	5	K59-2	K59-1 K40 T51 T38	探索;発見出来ず	—	—	—	0.0	温身平宿泊
4/18	水 A:26-1	4	K59-1 T51 K40 T38		探索;発見出来ず	—	—	—	0.0	温身平宿泊
4/19	木 A:23-4	5	K59-1 K59-2 T38	T51 K40	探索;発見出来ず	—	—	—	1.9	温身平宿泊
4/20	金								1.9	集落へ移動
4/21	土								0.0	元狩猟参加者の葬儀
4/22	日 B:16	4	K59-1	T51 T38 K40	探索;発見出来ず	—	—	—	0.0	
4/23	月 A:3	4	K59-1	T51 K40 T38	探索;発見出来ず	—	—	—	0.0	
4/24	火 A:23-1	4	K59-1	T51 T38 K40	探索;発見	巻く	捕獲♂		10.2	温身平宿泊
4/25	水 A:26-1	5	K59-1 I53	T51 T38 K40	探索;発見	巻く	捕獲♀		0.0	温身平宿泊
4/26	木 A:25-1	5	K59-1	I53 T51 T38 K40	探索;発見	巻く	逃がす		0.0	温身平宿泊
4/27	金 A:26-6	5	K59-1 I53	T51 T38 K40	探索;発見	巻く	捕獲♂		0.0	温身平宿泊
4/28	土								0.0	集落へ移動・肉等の分配
4/29	日 B:23	3	K64 K59-2 I47		探索;発見	接近不可	—	—	0.0	
4/30	月 A:18	5	K59-1 T68	K59-2 I53 I47	探索;発見出来ず	—	—	—	0.0	
5/01	火 B:16	6	K59-1 T68 I47	K59-2 I53 K40	探索;発見出来ず	—	—	—	0.0	
5/02	水 A:3	5	K59-1	K59-2 I53 I47 T68	探索;発見	巻く	逃がす		0.0	
5/03	木								0.0	大字入足
5/04	金								0.0	熊まつり*3準備
5/05	土								0.0	熊まつり*3実施
5/06	日 A:23-4	2	K59-1 T68		探索;発見	接近不可	—	—	0.0	温身平宿泊
5/07	月 A:25-1	5	K59-1 T68	K59-2 T51 K40	探索;発見	巻く	捕獲♂		0.0	温身平宿泊
5/08	火								11.4	温身平宿泊・宿泊場所清掃等
5/09	水								5.9	集落へ移動・肉等の分配
5/10	木								0.0	

*1 狩猟場所…図1を参照。例えば4/16に狩猟場所が「A:3」となっているのは、「玉川(A)」の3の番号の付いた沢(コタキ)で巻き狩りを展開したという意味。

*2 クマの冬眠穴を全員同一行動で探索したため、ムカダテ側とテッポウ側には分かれなかった。この日はクマを見つけることはできなかった。

*3 熊まつり…捕獲したクマの慰霊のため、法印(修験者)を呼んで行う儀式。現在はこの儀式を核とした観光イベントとなっている。

3. クマ狩猟活動における山地空間の把握に関する知識

クマ狩猟のプロセスは、出猟を決め、対象とする猟場を決め、クマを探索し、巻き狩りにより捕獲し、解体して持ち帰るといったものである。このプロセスを遂行するために、狩猟者は多様な知識と技能を必要とする。この中で、山地空間の把握に関する知識は最も重要である。なぜならば、山地空間の把握に関する知識は、広大な山地空間の中で自らの居場所を把握して迷わずに移動し、自らの居場所やクマの居場所を他の狩猟者に伝達して狩猟者間で情報を共有するために必

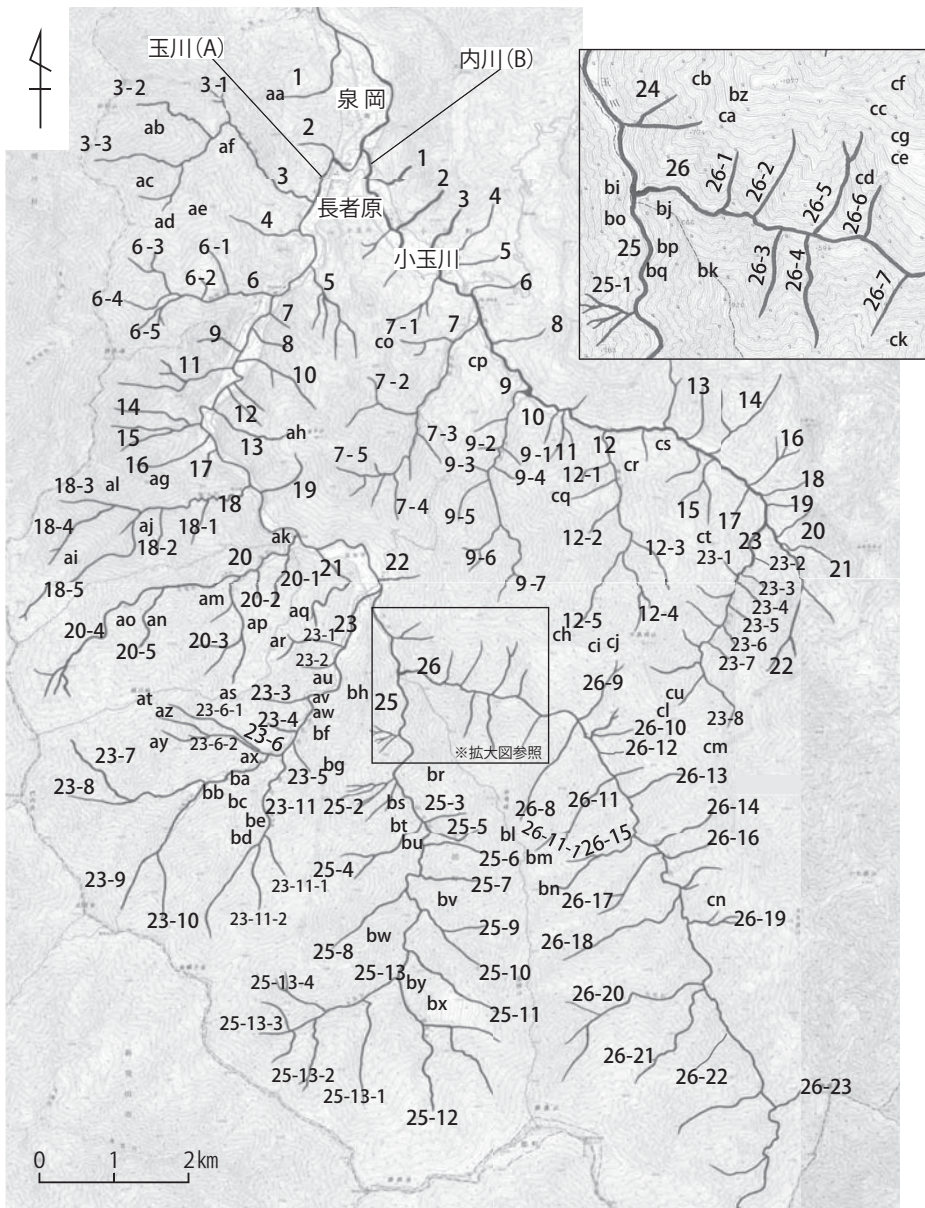


図1 小玉川地区の沢の図

国土地理院発行 1:25,000 地形図「長者原」、「叶水」、「飯豊山」及び「岩倉」をもとに作成。23などの数字は玉川・内川にそれぞれ流入する名称の付いた沢の通し番号、23-5などの枝番が付いた数字は、その沢に流入する名称の付いた支流の通し番号、ajなどの記号は地名が付けられた箇所を指す。

要であり、集団で行うクマ狩猟活動の根幹をなすものだからである。そこで、この知識を、狩猟者が用いている場所を示す表現に着目して明らかにしたい。

K59-1は、クマ狩猟中「オオマタのハヤブで去年はクマを獲った」(2001年4月25日)、「チャヤアナの一番上のサンカクの下さ(クマガ)来るもの」(2001年5月7日)という発言をした。ここで言う「オオマタ」や「チャヤアナ」は沢の名前である。しかし、この発言において、沢は単に水が流れる部分だけを意味するのではなく、その水流に係る分水嶺を境にした領域を意味している。このことから広大な山地空間が沢という領域の配置図として認識されていることが分かる。図1は、名称の付いた沢の配置図を、狩猟者からの聞き書きにより作成して示したものである。玉川本流と長者原で分かれる川を内川といい、この2つの川はオオカワと呼ばれる。このオオカワに沿い、148もの名前の付いた沢が配置されている。

また、上記発言における「ハヤブ」(図1拡大図内のbz)は、山中の特徴的な場所に付けられた地名で、ブナ林が広がる場所を意味する。図1のaa~az、ba~bz及びca~cuと記した73箇所は地名が付けられている。このうち、尾根の名称が13箇所、眺めが良い平坦部が13箇所、「ハヤブ」の例で示したように植生上の特徴がある場所が7箇所、崖の名称が6箇所、その他滝の名称、クマの冬眠穴、岩の名称等が34箇所あった。名称は、猟場を眺めた時に目標物となるものや、クマの探索等を行う場所、狩猟者が行動をする際に注意を要する場所に付けられている。

さらに、上記発言における「サンカク」とは遠くから見ると三角形に見える崖である。これ以外にも、表2に示すとおり、地形、植生、方向や位置関係を表す一般的な名称が用いられている。

以上から、山地空間の把握は、最初に沢の領域を特定し、次に地名又は地形、植生、方向や位置関係を示す言葉を組み合わせる形で行われることが分かる。そして、クマが出没しやすい場所をはじめとするクマの生態に関する知識と併せて、山地空間の把握に関する知識が活用されている。これは、「さまざまな自然環境に関する民俗分類は分類を重複することによって実用的で具体的な知識として使用される」[篠原1995:211]ということのよい例である。

しかし、実際にクマを発見し、その動きを伝達する局面においては、その位置をより限定的に特定する必要がある。この場合クマ狩猟中におけるT38のK59-2に対する次の発言も重要である。

「T68さんそこでぶったときよ、K59-2あんちゃんそこで待ってたっけべ。あそこのカミの松峰ぐ

表2 地形、植生、位置関係を表現する用語

i) 植生	
マツ	常緑で目立ち、頻繁に用いられる
ブナ	特に大木が場所を指し示す際に用いられる
ブノワラ	ブナの密生した場所
ナラ	特に大木が場所を指し示す際に用いられる
シバ	ヒメヤシャブシなどの細い木
ホダ	シダ類が開葉したもの
シンボリ	木の上のほうのこと
ホケル	ブナが葉開する前に芽が出た状態
アオツバ	ブナの葉が完全に葉開した状態
コノミ	ブナの実
シダミ	ミズナラの実
ii) 地形	
ミネ	尾根のこと
ヒド	通例、枝沢の支流。水が流れてなくぼみ
ユキト	雪の広がる場所
ヒラ	沢と尾根を結ぶ面
ツボヤマ	植物が生えていないようなつるつとした場所
サンカク	三角形をしたがけの部分
ダツカ	山中のわずかな平坦地
ダルミ	鞍部
デト	沢の出口
クロツバ	雪が積もってもすぐに落ちるような崖のようなところ
ダイテン	山の一番高いところ
カックイ	折れ曲がっている状態のこと 例) 緩斜面が突如急斜面になる場所 例) 大木が途中から折れ曲がっている状態
イワツボネ	岩山
ドサワ	オオカワに注ぐような大きな沢
マミネ	大きな峰
デツアキ	沢や尾根の先端
タナイ	山の中の平坦地 ダツカよりも広い
フックイ	川が雪に覆われて渡ることができるような状態
トツバ	クマを獲る場所。鉄砲を配置する場所
ガンクラ	岩壁のようなところ
iii) 位置関係	
カミ	上流側
シモ	下流側
ウエ	天側
シタ	地側
カツシャ	先のこと
クンダリ	平面沿いの地側
カゲ	ものの向こう側
カゲマエ	尾根をはさんでその反対側斜面のこと

らいまではよ、下に（クマの足）跡あったから」（2001年4月19日）

この発言は、「T68が今あなた（K59-2）がいる位置でクマをねらって鉄砲を撃った時が以前にあったが、その時あなた（K59-2）が待機していた場所の上流のマツが生えている尾根までは少なくともクマの足跡があった」という意味である。

これは、以前に同じ場所で行われたクマ狩猟における人々の配置や行動、クマの動きが狩猟者に記憶されていて、それが共通経験に基づく知識として利用されている事例である。共通経験に基づく知識は地名又は地形、植生、方向や位置関係を示す言葉を組み合わせるよりも、さらに細かい場所を特定し、簡潔に伝達することができる。このため、特にクマ発見時の切迫した場面でコミュニケーションを取るときには極めて有効である。

クマ狩猟が終了した後、狩猟者は、ヤマオヤカタの家で囲炉裏を囲みながら話し合い、その日行われたクマ狩猟の状況を共有する⁽⁴⁾。具体的には、猟場で分かれて配置されていた狩猟者それぞれの動きと、クマの動きの詳細を話し合う。特に、クマを発見したけれども捕獲できなかった日は、どのように判断、行動していればクマを捕獲できたのか等について話し合う。やがて話題は、その日の猟の状況に類似又は関連すると考える別の猟の場面に移り、話題は全く尽きない。

この話し合いの場では共通経験に基づく知識が特に重要となる。なぜならば、話題は、地名又は地形、植生、方向や位置関係を組み合わせるだけでは表現できない個別具体的な場所に関するものが多く、かつ、狩猟者は、猟の現場を見ながらではなく、猟場から遠く離れたヤマオヤカタの家で話し合いを行うからである。また、狩猟者は猟場ではテッポウ側、ムカダテ側等に分かれて行動するので、狩猟者はこの場で初めて、その日の経験を共通のものとして再確認することとなる。以上からこの話し合いは、共通経験に基づく知識が生成され、蓄積されていく場となっており、また、この話し合いの様子からは、狩猟者がクマ狩猟を通じて山についての知識を深化することを楽しみの一つとしていることが伺われる。

クマ狩猟は山地空間を舞台とした他の活動と同じ範囲で行われている。例えば、春のクマ狩猟が終わったところ、図1の内川全域、25-1（アナギ）より下流、20（ユザワ）より下流等でゼンマイ採取が行われる。秋には図1の全域でキノコ採取が行われる。さらに、1970年前後までは、図1の25-4（マミザワ）より下流の沢筋や尾根筋に複数箇所、23-6-2（カジカワ・カミ）より下流の尾根筋等で、ヒラ⁽⁵⁾によるクマの捕獲が行われていた。このため、クマ狩猟で獲得された山地空間の把握に関する知識は、これらの活動で必要とされる知識と共通する部分がある。そして、クマ狩猟の活動範囲は他の活動の範囲に比べて広く、クマ狩猟は他の活動に比べてより詳細な山地空間の把握に関する知識が必要とされる、と小玉川地区では考えられている。そのため、狩猟者は、地区の人びとから、山に関する知識を豊富に持つという意味で、「山に明るい」と一種尊敬の念を持って評されている。

4. クマ狩猟集団の特徴

次に、クマ狩猟集団の特徴を、人間関係という視点から明らかにしたい。小玉川地区内に居住している男性であり、本人の意志があれば、申出により自由にクマ狩猟集団に入ることができる。クマ狩猟集団に入ったきっかけは偶然にクマ狩猟に参加する機会を得てクマ狩猟に関わる何らかの経験をし、そこで印象深い体験をしたことである、という事例が多い。例えば、K59-1が初めてクマ狩猟に参加したのは18歳（1960年）くらいのときだったが、薪を取りに行くときに偶

然クマを見つけて、当時の狩猟者とともに撃ち取ることができたという体験がきっかけだった。特に熱中し始めたのはその後22～23歳の頃からで、獲物を捕えることができるということや、仲間と一緒に何時間でも一つの物事に熱中できるという点に面白みを感じたという。こうしたことから、狩猟集団に参加する機会は均等であると言えることができる。

また、家系や村落組織における地位や役割はヤマオヤカタの資質とは関係がない。ヤマオヤカタの資質として挙げられるのは、山に明るく、山に関する知識を活用できることである。特にクマを発見する力量、発見したクマの行動を予測する(これをズドオリという)力量が重要とされる。また、集団内の調整をする力量があることも資質として重要である。ヤマオヤカタは、これらの力量を背景としてリーダーシップをとる。さらに、ヤマオヤカタが引退を考え始めると、狩猟集団内では誰が次のヤマオヤカタになるかが意識されるようになる。そして、資質と照らして次のヤマオヤカタにふさわしい者が誰であるかということが徐々に共有される認識となり、先代のヤマオヤカタの意思表示によって最終的に確定する。このプロセスには、狩猟集団のメンバーの家系や村落組織における地位や役割は影響しない。以上から、クマ狩猟集団の特徴は実力主義であり、詳しい知識や技能等ヤマオヤカタとしての力量を十分持つ者により統率されていることが分かる。

さらに、クマ狩猟の成果分配について見てみたい。クマ肉は量りを利用して当該クマ狩猟に参加した狩猟者間で、10g単位で等量に分配された。骨及び蹠球は鉞(まさかり)でこぶし大の大きさに砕き、目測で等量に分配された。内臓については狩猟終了後にクマ汁に調理して参加者全員で食した。胆嚢と皮はそれぞれ狩猟者の知り合いを通じて買い手が現れて譲り渡されるまで保管され、譲り渡されたら、そのクマが獲れた際に参加していた狩猟者で平等に分配されることとなる。なお、近年では、収入を個人に分配せず貯めておき、クマ狩猟終了後の話合いで飲み食いする酒や食料の購入費用に充てるようになった。このように、クマ狩猟時の役割や捕獲に対する貢献度にかかわらず、クマ狩猟によって得た成果を平等に分配するという特徴があることが分かる。

ところで、小玉川地区には生活に関する多様な組織や社会関係がある。例えば、大字小玉川及び大字泉岡に設けられた共有地の管理組織、用水路の清掃等生産活動等に必要の共同作業を行う小玉川、長者原及び泉岡という集落単位の組織、自己を中心とする親族組織、本家分家関係等である。これらの関係は、地縁、血縁又は出自を契機に取り結ばれた、個人の意志によらずに定められた関係である。これに対して、クマ狩猟集団へは個人がその自由な意志で参加し、集団における役割も個人の實力や力量で決定される。また、生活に関係する多様な組織や社会関係による活動の参画単位は世帯である。これに対して、クマ狩猟の成果分配の単位は個人である。仮に狩猟集団のメンバーが親子関係にあっても、クマ肉や骨は一人一人等量に配分されることとなる。このことから、クマ狩猟集団は個人を重視した関係で取り結ばれていると言えることができる。

K59-1がクマ狩猟に積極的に参加している動機として「仲間と一緒に何時間でも一つの物事に熱中できるという点に面白みを感じ」たということを挙げているように、クマ狩猟集団への参画には仲間を作るという面がある。そして、クマ狩猟を長年続けていると、自己が、ある人、その父及び子とも一緒にクマ狩猟を行う経験を持つことになる。こうした場合にその関係を「サンダイトモダチ」という。つまり、クマ狩猟活動は人間関係を構築する場となっており、しかも、同世代に限らず世代を超える関係も構築されていると言えることができる。

5. クマ肉の贈与とクマ肉の地区内への広がり

狩猟者がクマ狩猟で得たクマ肉を、どのように利用するかについて見てみたい。クマ肉は、小玉川地区において非常に価値が高いものとして認識されている。その理由は主に次の3点にまとめられる。第1にクマ肉の味が良いためである。第2に狩猟者がクマ肉を得ることができる時期が限られるためである。そして第3に狩猟者はクマ肉を得るために多大な労力を費やさなければならぬためである。狩猟者は、クマ狩猟を行うために極めて多くの知識や技能を習得し、雪崩や滑落等の危険がある険しい山中で相当な体力を使う必要がある。特に春はクマ狩猟と田植え準備等が重なるため、狩猟者のいる世帯では田植え準備を行う人員が減り、家族にも労力がかかる。

2001年春のクマ狩猟では合計4頭のクマが獲られ、合計8人の狩猟者に表3のとおり分配された。8人のうち、7人（K59-1、K59-2、T51、K40、I53、T38、T68）はクマ狩猟に参加してクマを捕獲してクマ肉を得、1人（K64）はクマ狩猟には参加しなかったがクマを発見して捕獲に貢献したのでクマ肉を分配された。分配されたクマ肉の利用方法について、K59-1、K59-2、T51、K40、I53、T38、K64及びT68に聞いたところ、表4のとおりであった。宿泊業に携わ

表3 分配されたクマ肉の量

(単位 g)					
	クマA	クマB	クマC	クマD	合計
捕獲日	4/24	4/25	4/27	5/7	
分配日	4/28				5/9
計量	秤で計測				
K59-1	1,910	2,200	6,200	5,000	15,310
K59-2	—	—	—	5,000	5,000
T51	1,910	2,200	6,200	5,000	15,310
K40	1,910	2,200	6,200	5,000	15,310
I53	1,910	2,200	6,200	—	10,310
T38	1,910	2,200	6,200	—	10,310
K64	1,910	—	—	—	1,910
T68	—	—	—	5,000	5,000
合計	11,460	11,000	31,000	25,000	

観察より作成。

表4 クマ肉の利用方法

狩猟者	クマ肉の利用方法
K59-1	世帯内で消費、贈与
K59-2	世帯内で消費、贈与
T51	世帯内で消費、贈与、自ら経営する民宿で提供
K40	世帯内で消費、贈与、勤め先の宿泊施設で提供
I53	世帯内で消費、贈与
T38	世帯内で消費、贈与、自ら経営する民宿で提供
K64	世帯内で消費、贈与
T68	世帯内で消費、贈与

観察より作成。

表5 狩猟者と狩猟者がクマ肉を贈与した世帯との関係

狩猟者 贈与相手		K59-1	K59-2	T51	K40	I53	T38	T68	K64	合計
小玉川地区内に居住	親族関係	妻の兄弟	母の兄弟	母の姉妹 *2		妻の父の父の姉妹	母の姉妹	父の父の姉妹 *1	データ無し	14世帯 (延べ16世帯)
		妻の姉妹	父の姉妹	父の姉妹		妻の父の父の姉妹	母の姉妹			
		父の父の姉妹 *1		父の母の兄弟			父の母の兄弟 *2	父の母の兄弟		
			父の母の姉妹			父の母の兄弟				
その他の関係	近隣関係		本家分家関係		本家分家関係		近隣関係		4世帯	
小玉川地区外に居住	親族関係	子	妻の兄弟	姉妹	妻の兄弟	妻の母の兄弟	姉妹		データ無し	13世帯
		兄弟	父の兄弟			妻の母の兄弟	母の姉妹			
		姉妹								
		兄弟姉妹								
	その他の関係		友人(同級生)		妻の実家の本家	勤務先上司		地区外の家の近隣関係		7世帯
		友人					友人			
		友人								

注1…*1及び*2はそれぞれ同一世帯。つまり、*1の世帯はT68とK59-1から、*2の世帯はT51とT38からそれぞれクマ肉を贈与された。

注2…K64については、クマ肉の贈与に関して聞き書きをする機会を得ることができなかったため、「データ無し」とした。

る狩猟者(K40、T51、T38)は、得たクマ肉のほとんどを宿泊客に出し、残りを世帯内で消費しているが、その一方で贈与も欠かさずに行う。K59-2とT68は、得たクマ肉の半分程度を贈与にまわしたという。贈与する分量は、1回当たり200gから400gと幅があるものの、その考え方は「クマ汁を1回つくり、楽しむことができる程度の量」である。また、贈与は、最初にクマを獲って集落に戻り、狩猟者同士でクマ肉を分配した後に、なるべく早く行うことが好まれる。なお、その年の最初のクマの肉をハツモノという。地区内や、車で行くことができる町内の範囲については狩猟者が直接当該の世帯に届けることを基本とし、それができない場合は家族の者が行う。

以上の事例から、自家消費以外に贈与が共通して行われること、その年の最初に獲ったクマの肉をできるだけ早く贈与する傾向を読み取ることができる。

次に、クマ肉を分配された8人の狩猟者のうち7人について、贈与した相手とその関係を表5にまとめた。狩猟者と贈与相手との関係は、親族関係、本家分家関係、近隣関係、職場関係、友人関係(例えば、「普段からお世話になっている」、「小学校時代の同級生」等)が挙げられた。親族関係は27世帯(延べ29世帯)と最も多く、その他の関係では本家分家関係が3世帯、近隣関係が3世帯、職場関係が1世帯、友人関係が4世帯となっている。また、小玉川地区内の者に対する贈与は18世帯(延べ20世帯)、地区外の者に対する贈与も20世帯となっている。

親族関係であっても、それが狩猟参加者である場合には、贈与しない。例えば、I53はシングル関係にあたる狩猟者I47とT59に対してクマ肉を贈与しなかった。これは、I47とT59はクマ狩猟に参加してクマ肉を得る機会があるからという理由であった。ただ、I47がクマ狩猟に参加した4月29日～5月2日の4日間にクマは獲れず、T59は5月5日に開催された熊まつりには参加したが、2001年春のクマ狩猟には参加しなかった(表1参照)。

この事例から、親族関係への贈与に着目すると、小玉川地区外に居住する親族については2親等の者が最も多く、一番遠くとも3親等であるのに対し、小玉川地区内に居住する親族については、2～4親等の者に対して広く贈与している。このような自己を中心として妻側を含めて双方向に広がる親族関係のうち、小玉川地区内に居住する者が構成員となる世帯は特にシングルと言われる。シングルは、田植え等の生産活動に対する手伝い、雪囲い等家屋敷地の維持管理に係る作業に対する手伝い、金銭的な援助、家屋の新築作業に関する手伝い、子の結婚に係る相談に乗ること、冠婚葬祭の手伝いといった活動を、共同で行う。これらはシングル関係にある者同士でしか行わず、シングル関係は生活の互助が行われる関係であるといえる。

贈与を通じたクマ肉の広がりについて見ると、クマ肉を得た狩猟者は8人で、小玉川地区49世帯中その割合は16.3%となる。しかし、狩猟者からの贈与を通じてクマ肉を得た世帯は筆者の調査で明らかになっただけで少なくとも18世帯(延べ20世帯)であり、狩猟者の世帯を合わせると全体で26世帯(53.1%)がクマ肉を直接得たことになる。

さらに、狩猟者によるクマ肉の自家消費の様相や、狩猟者から贈与を受けた者によるクマ肉の利用について見ると、民宿で客にクマ汁を多く出した場合は世帯内のみで食そうとする傾向があるが(T51とT38)、それ以外ではシングルを家に呼んでクマ汁にして食べることが多い。I53はクマ汁を作るときは必ずシングルを集めて食べるが、ウサギ汁は世帯内で楽しむという。クマ肉を得た世帯が、小玉川地区内に住むシングルと共にクマ肉を消費することを通じて、クマ肉は更に広がっているものと考えられる。この他、K59-1、K59-2及びK40は別居している子や兄弟

など近親者が家に来た時に、T68 は友人や会社の同僚等の客が来た時に、彼らと共に食すという。

以上のことから、クマ狩猟活動の成果であるクマ肉はただ単に狩猟者自身のものであるばかりではなく、クマ肉の贈与やクマ汁の消費を通じて地区内に広まり、小玉川地区内の生活における人々の交流のきっかけの一つになっているといえる。

6. おわりに

本稿で述べてきたようなクマ狩猟活動を、短絡的に趣味程度のものだと切り捨ててしまう場合、ひとつの問題点が生じる。それは、クマ狩猟活動が「仕事や労働の対概念としての余暇」[菅 1998: 244] 中で行う純粋な趣味と同質であるという印象を与えてしまうことである。確かに、現在行われているクマ狩猟活動にそうした要素が一部存在することは否定できない。しかし、この点のみを殊更強調するのは極めて一面的な見方に過ぎない。実際には、クマ狩猟活動は多様な意義を持つ活動である。クマ狩猟活動は山地空間の把握をはじめとして自然に対する詳細な知識を必要とし、その知識は新たに生成もされている。そして、これらの知識は山中における他の生業活動に必要な知識とも共通している。また、狩猟集団の持つ参加機会の均等性、実力主義、成果配分の平等指向といった特徴から、個人を重視し、世代を超えた人間関係を構築する場となっていることが分かる。さらに、狩猟者は、地区内に住む生活互助関係にあるシンルイ等に対してクマ肉を贈与する。贈与されたクマ肉は、クマ汁を共食することを通じて地区内に広がり、人々の交流のきっかけともなっている。

このようなクマ狩猟活動が持つ多様な意義をふまえれば、「戒律がなくなって狩猟組織が解体した」というよりも、「集団で狩猟を行う枠組は維持され、その枠組を特徴づける要素が変化してきた」と捉えるべきである。これまでクマ狩猟活動の持つ経済的な意味が注目されてきたが、これらの多様な意義はその経済的意義が低下して顕在化したものであると考えられる。

なお、筆者は、今後、クマ狩猟活動が持つ多様な意義をふまえた狩猟及び鳥獣保護の制度について検討したいと考えている。近年、クマの地域的絶滅が危惧されている一方で、それ以外の地域ではクマが人里へ大量に出没して人との軋轢が生じるといった問題が起きている。このことから、現在、鳥獣保護管理の担い手育成、個体数調整、生息環境管理、防除対策を含めた総合的な狩猟及び鳥獣保護制度を再構築する必要があるという議論が盛んに行われている。

この議論の中で、クマ狩猟活動が純粋な趣味と位置づけられた場合、動物愛護の観点から、クマ狩猟活動は「絶滅が危惧されている種であるクマを単なる趣味で捕獲する行為は許しがたい」と糾弾されるであろう。また、現在、春のクマ狩猟活動は人身被害防除を目的とした有害鳥獣捕獲制度に基づき行われているため、鳥獣の保護管理の観点からは、「目的を偽って趣味としての狩猟をしている」と非難されるであろう。そして、我々が現在行われているクマ狩猟活動を趣味程度のものだと片付けてしまうことは、これらの主張に正当性を与えることになる。

むしろ、民俗学の観点からは、クマ狩猟活動の持つ多様な意義をふまえ、クマと生活領域を共有している山奥の村落ではクマを資源として利用する生活が継続されていることを指摘すべきである。併せて、本来多様な意義を持つクマ狩猟活動が、現在は有害鳥獣捕獲という制度の下に行わざるをえない状態に置かれ、実態が後からできた制度と乖離していることを指摘すべきである。

今後、山地空間の把握に関する知識以外の狩猟技術や、村落社会の生活におけるクマ狩猟活動の位置づけ等、クマ狩猟活動が持つ意義の全体像を明らかにしていきたい。このことを通じて、

狩猟及び鳥獣保護制度の再構築に関する議論の妥当性を検証し、クマ狩猟活動が持つ多様な意義を制度の中に盛り込むという社会実践ができるのではないかと考えている。

註

- (1) 近世では村が鳥獣の防除目的で猟師を雇い、鳥獣を捕獲していた例もある [永松 2005: 59-65]。田口洋美 [田口 2000: 99] は、近年狩猟が果たす農作物の防除の役割が大きくなったことを「近代初頭以来の狩猟の役割への回帰」と指摘している。
- (2) 「戦後の人口流出とともに、マタギ集落の狩猟組織は実質的に解体する方向へ進んだ。また市場偏重型の狩猟の崩壊が、狩猟を生業の地位から伝統的活動の踏襲といった地位へ身を落とすことによって、マタギ文化は終焉期を迎えることになった」 [田口 2000: 100]、「大正末年にカモシカが禁猟となり、多くのマタギの対象とする動物がカモシカからクマに移ったとき、狩の季節が変化し、技術も道具も転換を余儀なくされ、冬山でのきびしい戒律も不要となった。同時にシカリ、ヤマサキを指導者とする狩組の組織もゆるみ、その解体が進行することになった」 [千葉 1986: 33] という記述が、こうした認識をよく示している。
- (3) 本稿では、狩猟者各人を、集落名の頭文字(小玉川:K、長者原:T、泉岡:I)と年齢との組合せで表現することとする。例えば T51 は長者原に住む 51 歳の狩猟者を意味する。また、同じ集落に同年齢の者が 2 名いた場合は、例えば K59-1 及び K59-2 として枝番で区別した。
- (4) こうした話し合いの時間は、出猟した 17 日間で 1 日平均すると約 4 時間半程度である。
- (5) ヒラは重力式のクマの罠のこと。 [田口 2000: 93] 等に詳細が掲載されている。

文献

- 篠原 徹 1995 『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館
- 菅 豊 1998 「深い遊び—マイナー・サブシステムの伝承論—」篠原 徹編『現代民俗学の視点 第1巻 民俗の技術』朝倉書店
- 成城大学民俗学研究会編 1977 『山形県西置賜郡小国町小玉川民俗調査報告書』
- 田口洋美 2000 「列島開拓と狩猟のあゆみ」『東北学』3
- 千葉徳爾 1986 『狩猟伝承研究 総括編』風間書房
- 塚本閣治 1941 『文化写真叢書 2 雪と闘ふ人々』東亜書林
- 永松 敦 2005 『狩猟民俗研究—近世猟師の実像と伝承』法蔵館
- 松井 健 1998 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体—」篠原 徹編『現代民俗学の視点第1巻 民俗の技術』朝倉書店
- 湯川洋司 1983 「山と海の生産」福田アジオ・宮田 登編『日本民俗学概論』吉川弘文館